



「声」の欄・投稿規定

★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接誌面に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽にお寄せください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。

★「声」の欄には、また皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。

★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。

★ご投稿は郵送のほか、FAX（番号：03-6838-9222）とE-mail（アドレス：hifubyoh-shinryoh@kk-kyowa.co.jp）にても受け付けております。

★原稿には住所・氏名を明記していただきます。

爪白癬の爪はなぜ捻れるのか？

爪白癬の患者さんに爪切りを頼まれることは珍しくありません。モコモコと膨れて増殖肥厚しているのはニッパー式でないと削れませんが、中には変形した爪が伸びすぎて180度反り返って弯曲し、爪母部に刺入しているのときに見受けられます。糸状菌の増殖で爪甲が肥厚するのは理解できるのですが、なぜあのように偏倚し捻じ曲がって成長するのでしょうか？ 朝顔のツルの回転は茎の接触面の成長が抑制されることの繰り返しによる結果だそうですし、動物の角が螺旋状に捻れるのは角の断面上3カ所にある成長点の伸びるスピードの違いだと聞きます。それでは、爪白癬が捻れて成長する理由は何なのでしょう？

石川博康

（八戸市・湊高台皮膚科）

【コメント】

ご質問の内容から、図に示したような形状の爪の成因についての考察をお求めと考えました。

この例は爪甲鉤彎症と爪白癬の合併例でした。まず爪甲鉤彎症は爪甲が肥厚く、硬くなり、鉤状に彎曲する状態です。爪甲は側爪郭との関係が断たれ、また遊離端では爪床との関係も絶たれ浮き上がった状態になっています。爪甲は上方向あるいは左右に捻じれて伸展することが可能になっています。角質増殖部からは皮膚糸状菌が検出され



図 爪甲鉤彎症と爪白癬の合併例。

ました。

爪甲鉤彎症の成因について信頼できる成書¹⁾では2つの要素が強調されています。まず爪甲の前方への伸展を阻害する趾の先端背面の隆起の存在です。正常では爪甲が側爪郭、爪床としっかり接着しており、歩行時や踏ん張った際に趾先端を押し下げる向きに力がかかります。一方深爪、爪甲下血腫で爪甲が短い、あるいは爪甲と下床の皮膚の関係が断たれた状態では歩行時に床面方向から押し上げる力が働き、遠位端の隆起が生じます。爪甲の前方への伸展はこの隆起により阻害され、肥厚し、横溝が形成され、伸展する方向が変わるというものです。もう1つは爪甲下角質増殖です。脆い角質が厚く増殖することで、爪甲の成長のベクトルは上方に向かいます。ここで白癬は爪甲下角質増殖の原因になります。さらに、爪甲が彎曲



して上方に向かうと前方からの力で押しつぶされるように後ろ方向に伸展します。左右いずれかの側爪郭との付着に差がある、あるいは伸展の速度に差があると捻じれが生じると考えられます。この傾向は適切に爪切りを行うか、外傷などで爪がもげるように脱落しないかぎり続きます。

さて治療ですが、この状態から真菌を取り除いただけではこの爪甲の変形がもとに戻らないことは容易に予測できます。上記の1番目の要素は手付かずだからです。根本的な治療法として抜爪とテーピング固定、あるいは先端背面の隆起に対す

る手術療法が考案されています¹⁾。便宜上、病爪をできるかぎり平坦になるように取り除くと靴も履けるようになり、QOLも上昇します。こうした爪甲を処置できるのは手慣れた皮膚科医以外ありません。爪甲鉤彎症の処置に適切な点数が付くことが強く望まれます。

望月 隆

(金沢医科大学皮膚科学講座教授)

＜参考図書＞

- 1) 東 禹彦：爪 基礎から臨床まで 改訂第2版 金原書店、東京、2016

皮膚病診療

皮膚病のための皮膚病総合雑誌

皮膚病診療ホームページのご案内

最新号の案内、本誌過去論文(2000年, Vol.22以降)の検索、「声」の欄への投稿など盛りだくさんのコンテンツを用意しています。IDやパスワードなどは不要です。アクセスをお待ちしております。

※論文の目次検索は、「トップページ」→「目次一覧／特集一覧」→左上の「目次検索」、論文タイトル、著者・共著者、キーワードからの検索が可能です。

<http://www.hifubyoh-shinryoh.com>